

韓国語における条件標識の 拡大現象に関する文法化からの分析

具 顯禎 (祥明大學校、
韓国語活用論)



1. 前書き

条件という範疇は長い間、哲学や言語学の研究対象になっており、最近、認知的な普遍性に基づいた文法化理論の研究と共に注目されている。条件という範疇の特性をAsher(1994:623)は次のように定義しているが、日本語では「と」「なら」「ば」「たら(たら)」などがここに属する。

Conditionals reflect the ability to reason about alternative situations. They consist of two constituents, the first of which is called the “protasis” or the “antecedent” and the second the “apodosis” or the “consequent”. The antecedent expresses what is hypothetically (counterfactually, possibly . . .) so, while the consequent states what, given this condition, will be (would have been, might be . . .) the case.

認知的な観点からの先行研究における条件とは、他のどんな要素にも還元できない概念上のプリミティブ(conceptual primitives)であり、言語の普遍的な特性を持ち(Wierzbicka 1997:25)、強い統語的な範疇を形成するというより、基本的には意味論・語用論的な範疇として現われる(Traugott & Ferguson 1982:1)という。

全ての言語形態がそうであるように、韓国語における条件をあらわす形態も、多くの変化を経て現在使われている形態となっている。この研究では文法形態が語彙的な形態から文法的な形態へ、そしてより文法的な要素の強い形態へと変化するという文法化理論の観点から、条件形態の文法化現象を考察しようとしている。よって韓国語におけるコーパス(corpus)を活用し、頻度数(frequency)に基づいて定量的に分析していきたい。

2. 条件標識の文法化

2.1. 条件の初期形態

韓国語の条件が記されている現存する文献資料は、その数が限られているため、新羅時代の郷歌資料から研究を始めなければならない。¹郷歌には条件標識が「等」または「等隱」だけで記されているが、「等」は「等隱」の縮約型だという点から、条件標識を再建すると「-든/든 (tun/tAn)」に当てはまる形態になる。その後どのような形態がどういう経路で発達して来たかは明らかではないが、15世紀の資料では条件標識が非常に多様な形として現われている。その中には、現代韓国語でもよく使われている代表的な条件標識である「-거든(ketun)」と「-으면(umyen)」がある。

「-거든(ketun)」と「-으면(umyen)」は次のような語源的構成を持っていると考えられる。(具顯禎 1999)。

(1) -거든/거든 (-ketun/ketAn) 「거+ㄷ+은/는」

-거- (-ke-) : 確定法をあらわす先語末語尾

-ㄷ- (-tA-) : 場所 事物 > 時間

-은/는 (-un/nun-) : 主題標識

1 郷歌は漢字の音と訓を借りて表記されているので実際の言語現象を反映することができず文法的形態はいくつかの形態だけで使っていたという点から、その時期の正確な言語の資料として受け入れるには限界がある。

2 この時期の条件標識としては「-든、-든、-거든、-어든、-거든、-으면、-은덴、-은덴、-은단、-은든、-단、-으란디、-관디、-관디、-완디、-을덴、-늘、-늘、-을시언덩、-을씨언덩、-을선덩、-은돌」などが現れる。(權 在一 1998:205-6)

3 「-거든」の語源的な構成に関して徐泰龍(1998)の「거+ㄷ」(徐泰龍 1988)のほか、「거 +ㄷ/더+은」(具顯禎 1989)、「거+名詞的要素ㄷ/드+은」(徐泰龍 1997)の見解などが提示されている。しかし、ここに提示された「-드/더-」が場所や事物をあらわす「-ㄷ-」から時間をあらわすことに文法化したことから結局同じ見解だと見なすことができる。

(2) -으면(-umyen) 「으며+은/는」

-으며(-umye): 同時的な時間の連結標識

-은/는(-un/nun): 主題標識

従って、韓国語の条件標識である「-거든」と「-으면」は、上記の時間性と主題という概念の結合から出来ており、「時を主題に」のような意味合いを持つという点で類似していることが分かる。

2.2. 条件標識における文法化の様相

条件の代表的な形態である「-거든」と「-으면」が、文法化の過程を明らかにするための適切な資料として『老乞大』という諺解類の文献があげられる。『老乞大』のような諺解類の文献は、1512年頃の『翻訳老乞大』と、1670年の『老乞大諺解』、そして1765年の『清語老乞大』と1790年頃の『蒙語老乞大』として刊行された資料があるだけでなく、1995年には『翻訳老乞大』を現代韓国語に翻訳した資料があり、各時代における形態の変化が簡単に把握できる。これらの資料と現代韓国語のコーパスを通して次のような文法化現象が分かる。

(3) 各時代別の「-으면」と「-거든」の使用頻度数

	翻訳老乞大 (16世紀)	老乞大諺解 (17世紀)	蒙語老乞大 (18世紀)	訳注 翻訳老乞大 (20世紀)
-으면(umen)	142	165	186	227
-거든(ketun)	98	86	47	29

4 Akatsuka (1985:636-7) では日本語で条件標識は条件機能と時間性機能を共に遂行するとい
い、次のような例を提示している。

a. Sibahu o kattara, okane o kureru?

“If I mow the lawn, will you give me some money?”

b. Sibahu o kattara, okaasan ga okane o kureta.

“When I mow the lawn, mother gave me money.”

即ち、「-거든」が「-으면」へと代わっていく速度が段々加速化していることが分かる。言い換えれば、「-거든」の機能が急速に狭まってきたのに対して、「-으면」の機能が急速に拡大(spread)していることが分かる。

(4) a. 갑곳 잇거든, 풀오 ㅎ다가 ㄹ장 디거든, 안직 머추워 두어든
(翻訳老乞大上70)

b. 갑시 이시면, 풀고 ㅎ다가 ㄹ장 천하면, 아직 잠싼 머물워
두리라 (老乞大諺解上63)

(売る価値があれば販売し、もし価格がとても安ければ、もう少し待って(持って) いる方がよからう。)

このような条件標識の変化に反映された文法化原理は次のようである。

第一に、一般化(generalization)現象である。Bybee & Pagliuca(1985:63)は文法化において一般化が持つ重要な意義は、意味の特殊性が少ないほど、その形態が使われる範囲が広くなり、結局はその分布が拡大していくという。このような側面から[同時性]のみを現していた「-으면(-umyen)」が、[継起性]までを含む [時間性]の標識として一般化され、これが分布の拡大につながったと説明することができる。即ち、意味が減少するにつれ機能は増加していくのである。またBybee & Pagliuca(1985:76)は意味の一般化は自然に音韻的な減少と融合を伴うと主張した。現代韓国語の口語体ではこのような減少と融合が現れている。

(5) ㄱ. 그 사람이 출발했다면은 어떻게 하니?

ㄴ. 그 사람이 출발했다면 어떻게 하니?

ㄷ. 그 사람이 출발했다 어떻게 하니?

(あの人が出発していたらどうするの?)

これに反して、「-거든」は段々一般性を失っていくので、その形態が使われる範囲は益々縮まり、使用頻度数が低くなるのである。実際その前の時期には現われなかった人称や意向法の制約が現代韓国語に現れるのも「-거든」が特殊な意味を持っているということを物語っている。

第二は、特殊化(specialization)現象である。特殊化とは、一つの文法素が特定

機能を専門的に担う現象をさすが(Hopper 1991)、条件標識と関連した類似の機能を担う様々な形態がお互い競争し合った結果、「-으면」が条件標識の機能を全て担う文法素として変化する特殊化が進むと同時に、「-거든」は相対的に条件標識から退くことになった。

第三は、重層化(layering)現象である。重層化とは、旧階層と新階層が共存する現象をいう(Hopper 1991)。「-으면」が出現したとして「-거든」がすぐに消えることではなく、一緒に使われながら一般的な条件標識としての機能は大部分「-으면」が担うことになり、「-거든」は特定の文脈においてのみ条件標識として機能することになる。

第四は、分化(divergence)現象である。分化とは、同じ語源から生まれた文法素が機能において、その役割が分けられる現象をいう(Hopper 1991)。統語的な制約が現われると共に分布が制約され、条件標識としての機能を「-으면」へと譲渡することになった「-거든」は条件連結語尾の役割から終結語尾として使われるようになり、新しい談話的な機能を得るのである。大韓民国国語データベースII (KAIST KORTERM, 1998)によると、「-거든」が使われた1,617個の用例の中、終結語尾として使われたのが1,062個である。このような変化は主に口語体において談話参加者の間の意味交渉過程で多様な語用論的推論によって理由、原因、強調、婉曲などの意味が習慣化されつつ、新しい終結語尾の意味へと編入されるのである。

- (6) 甲： 얼굴색이 안 좋은데 무슨 일이야?
(顔色がよくないけど、どうしたんだ?)
乙： 응. 부부싸움을 했어.
(うーん。夫婦げんかをしてたんだ。)
甲： 그런데?
(それで?)

乙：마누라가 30일간 아무 말도 안 한다고 했거든.

(嫁さんが30日間は何も言わないって言ってたんだ。)

甲：그거 기쁜 소식 같은데?

(それって嬉しい話みたいだけど、)

乙：그랬지. 그런데 오늘이 딱 30일째 되는 날이거든.

(そうだろう. だけど今日がまさに30日目になる日なんだよ。)

五番目は、主観化(subjectification)現象である。主観化とは言語形態の意味が変化する際には、より主観的でない意味からより主観的な意味へと変化していくことをいう。即ち、命題や外延中心の意味に話者自身の視点を透写することで、段々主観的な意味へと変化していく過程のことであり、実際的な状況から談話的な状況へと変化していく課程でもある(李星夏 1998:151)。「-거든」が終結語尾として主観的な判断、即ち認識的な叙法(epistemic mood)を現わす文の終結語尾として機能をするということ(具顯禎・李星夏 2000)は、このような現象の証拠であると言える。

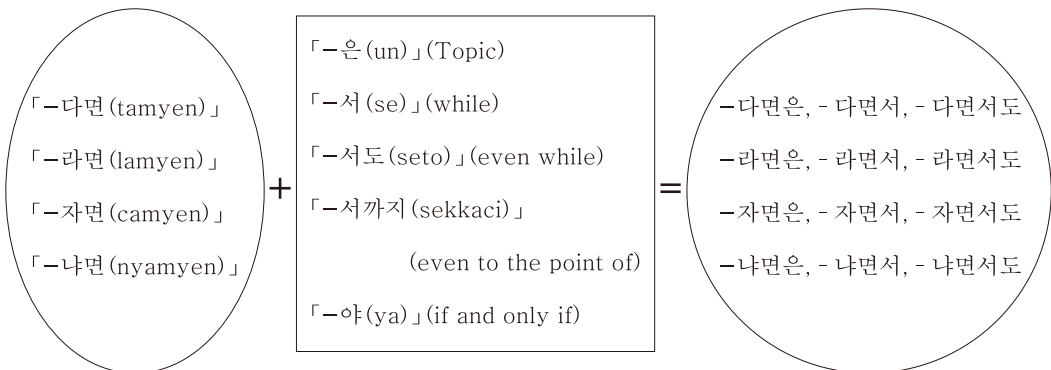
2.3. 複合条件標識の生成

ではこのような変化が現われる間、条件として沢山の機能を担わなければならない「-으면」には、どのような変化があり、又どのように機能を拡大していったかを明らかにする必要がある。その中、とりわけ「-으면」と機能的な分化を見せているのは「-다면(tamyen)」類の「-다면/라면/냐면/자면」である。これらの形態が現れる過程を歴史コーパスを通して調べてみると、引用助詞が変化するパラダイムと脈を共にしていることが分かる。

引用助詞/引用文				複合条件標識			
敘述	命令	疑問	勧誘	敘述	命令	疑問	勧誘
-다/라고	-라고	-냐고	-자고	-다/라면	-라면	-냐면	-자면
-다/라고하고	-라고하고	-냐하고	-자하고	-다/라고하면	-라고하면	-냐고하면	-자고하면

15C	0 409	0 70	0 13	0 0	0 19	0 0	0 4	0 0
16C	0 698	0 104	0 22	0 4	0 11	0 0	0 4	0 19
17C	2 817	1 94	0 9	0 20	0 22	0 0	0 0	0 2
18C	6 802	0 145	0 17	0 26	0 62	0 26	0 3	0 6
19C	1,569 725	439 83	16 46	58 34	14 71	4 17	0 2	14 8
20C	846 1,249	266 99	14 50	47 45	6 100	1 11	0 37	15 12

これは文法形態素の変化が単一なる形態(gram)変化ではなく、パラダイム全体的な変化として現れており、これを誘導するのは類推(analogy)であることを示している。18世紀の資料において、「다 ᄇ고(*ta hAko*)」という引用文の構造から「-다고(*tako*)」という引用助詞としての文法化が成立していることが分かる。更に、これは引用文の構造全体に影響を及ぼし、19世紀以後には「-다면(*tamyen*)」類の複合条件標識が生成するのだ。このような複合条件標識に更に他の助詞が加わり、様々な複合条件標識を作られるのだ。このような作業こそが文法標識の拡大に影響を与える重要な要因であることが分かる。



参考文献

- 具顯禎 1989 「条件の原形態と「-거든）」 『霽曉李庸周博士還曆記念論集』ソウル：図書出版ハンセム
- 具顯禎 1998 「条件の意味に関する認知的な接近-隣接範疇との関連性を中心に-」 『国文学研究』 第7集、91-122 祥明大學校
- 具顯禎 1999 「凡言語的に見た条件の範疇の文法化」 『韓国語の意味学』4、161-188韓国語意味学会
- 具顯禎・李星夏 2000 (Koo, Hyun Jung & Seongha Rhee) Grammaticalization of a Sentential End Marker from a Conditional Marker. Paper presented at Southeastern Conference on Linguistics at the University of Mississippi. Oxford, Mississippi.
- 具顯禎・李星夏 2001 「条件標識において文の終結標識としての文法化」 『談話と認知』8-1 談話認知言語学会
- 權在一 1988 「接続文構成の変遷様相」 『言語』13.2、493-515 韓国言語学会
- 權在一 1998 『韓国語文法史』 ソウル：図書出版パギジョン
- 徐泰龍 1997 「語末語尾の変化」 『国語史研究』 ソウル:太学社
- 徐泰龍 1998 「接続語尾の形態」 『文法研究と資料』 ソウル:太学社
- 李星夏 1998 『文法化の理解』 ソウル:韓国文化社
- 鄭在英 1996[1993] 『依存名詞「ㄷ」の文法化』 ソウル:太学社
- Akatsuka, Noriko. 1985. Conditionals and the Epistemic Scale. *Language* 61-3: 625-639.
- Asher, Ron E. (ed.) 1994. *The Encyclopedia of Language and Linguistics*, vol. 2. New York: Pergamon Press.
- Bybee, Joan L. and William Pagliuca. 1985. Cross-linguistic Comparison and the Development of Grammatical Meaning. In Jacek Fisiak (ed.) *Historical Semantics, Historical Word Formation*. Berlin: Mouton. 59-83.
- Bybee, Joan L., and Paul Hopper. 2001. *Frequency and the Emergence of Linguistic Structure*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

- Bybee, Joan L., Revere Perkins, and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Haiman, John. 1978. Conditionals are Topics. *Language* 54: 564-589.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi, and Friederike Hünemeyer. 1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hopper, Paul. 1991. On Some Principles of Grammaticalization. In Traugott & Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization*. Vol. 1: 17-35. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Traugott, Elizabeth Closs & Charles A. Ferguson. 1982. *Toward a checklist of conditionals*, MS, Stanford University.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1985. *Conditional Markers*. In Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Wierzbicka, Anna. 1997. Conditionals and counterfactuals: conceptual primitives and linguistic universals, In Athanasiadou, A. & R. Dirven, (eds.) *On Conditionals Again*, Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.